

会議名	科学飼料協会第 383 回月例研究会 「豚の栄養・飼料に関する最近の研究の進展」
開催日時	平成 18 年 7 月 20 日（木）；13：30～16：00
開催場所	馬事畜産会館 2F 会議室（東京都中央区新川 2-6-16）
主催者	（社）日本科学飼料協会
参加人数(概数)	約 40 名
1. 会議の概要 （別添の研究会 資料参照）	<p>講師が取り組んでいるアミノ酸制御による脂肪交雑のある高品質豚肉生産に関わる研究を中心に、栄養学的手法による豚からの環境負荷物質排せつの低減技術、未利用資源や食品残さ活用への取り組み、安全・安心な豚肉生産に向けた面カラの取り組みなど、豚の栄養・飼料に関する最近の研究成果などが紹介された。</p> <p>講演の内容は、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 養豚を取り巻く状況の変化 2. 栄養制御による豚の筋内脂肪含量増加に関する最近の研究成果 <ol style="list-style-type: none"> 2. (1) 栄養と豚の筋内脂肪（IMF）含量増加（海外） 2. (2) 国内における豚の「脂肪交雑」の流れ 2. (3) 豚の筋肉のエネルギー代謝に関わる基礎研究の成果 ⇒畜産技術協会公募課題へ応募。 勝俣氏には当協会の畜産新技術開発活用促進事業により平成 18、19（予定）委託課題「飼料中リジン濃度の制御による霜降り豚肉生産技術の確立—適正リジン濃度と栄養制御期間の検討—」を委託した。 2. (4) 栄養制御による脂肪交雑に関わるその他の研究 2. (5) 食品リサイクル飼料給与によるロースの筋内脂肪含量増加 2. (6) 規格外バレイショサイレージを活用したロースの筋内脂肪含量増加 2. (7) 今後の課題 3. 養豚の飼料自給率向上にかかわる取り組み（H18 年度高度化事業採択課題） <ol style="list-style-type: none"> 3. (1) 多収飼料米品種を活用した高品質豚肉生産システムの確立 3. (2) カンショ活用型養豚による自給率向上とハイパー豚肉生産 4. 栄養学的手法による豚の環境負荷物質はいせつ低減 <ol style="list-style-type: none"> 4. (1) 豚からの環境負荷物質低減技術 4. (2) フィターゼの亜鉛代替効果 4. (3) 環境負荷物質を低減する飼料の設計とその効果 4. (4) 亜鉛を過剰給与する試験成績 5. 未利用資源を活用した取り組み <ol style="list-style-type: none"> 5. (1) 低・未利用資源を活用した飼養技術および特徴ある豚肉生産 5. (2) 低・未利用資源を活用した飼養技術および特徴ある肉・卵生産 6. 飼料の工夫による安全・安心な豚肉生産

	7. 豚における栄養飼料研究の流れと今後の展望
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる課題・話題	勝俣氏には当協会の畜産新技術開発活用促進事業により平成 18～19（予定）年度に、「飼料中リジン濃度の制御による霜降り豚肉生産技術の確立―適正リジン濃度と栄養制御期間の検討―」を委託しており、その成果が期待できる。
3. その他の発表課題で関心のあったもの	今回紹介された話題の中で、2.（5）、3.（1）、5、6の話題は個別の話題としても興味のあるものを感じさせられた。機会があればより掘り下げた話が聞きたいものと感じさせられた。
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	話題 6.の中で触れられた飼料の機能性に関する豚の実験成績は、同じ単胃動物であるヒトの栄養とも深く関わるものと思われ、この実験手法はヒトの食品の機能性評価に応用できるものが少なくないと感じさせられた。この点から研究資金源として、「トクホ」、「食育」、「食品安全」関連プロジェクトにも注目すべき必要があろう。
報告者	針生 程吉